

石造物に見る津軽の飢饉

関根 達人

18世紀、世界規模で寒冷化が進んだということがよくいわれますが、江戸時代の東北地方では冷たい北東風(ヤマセ)の影響を受けて、飢饉が頻発しました。ここ津軽も例外ではありません。津軽地方を襲った三大飢饉といわれているものの一つは、1695年の元禄の飢饉です。この時には餓死者が10万人あまり発生し、疫死者を合わせると津軽の全領民の約3分の1が犠牲になったといわれています。

その次の大きな飢饉として、天明の飢饉があります。これは1783年から2年連続しての不作による飢饉です。この時には、領内人口の約3分の1から半数が犠牲になったといわれています。またこの死者に加えて、他国へ逃れた難民も8万人ほどいたと推測されています。

三つ目が天保の飢饉です。これは1832年から38年にかけての長い期間にわたる飢饉でした。死者と他領へ逃れた者の数については詳しい数字が資料の中に出てきます。これらは主に藩の公式な記録や日記といった、いわゆる古文書の中に出てくる数値です。

私は墓石など研究しています。江戸時代はキリスト教が禁止されていたので、死者はお寺で供養されることとなります。お寺では、どここの誰さんがいつ死んだということを過去帳に記録しています。

しかし飢饉や疫病の大流行などで大量死した場合は、こういう個別の供養はなされません。飢饉の供養塔などで一括して供養されることとなります。飢饉といえは多くの方が関心を持たれるのが「いったいどれくらいの被害が出るのか」ということでしょうけれど、私は「生き残った人がその後どう生きたのか」あるいは「精神的な面で飢饉をどう乗り越えたのか」ということに関心があります。供養というものはそのためのひとつのキーワードで、これを通じて飢饉というものを見てみたいのです。

■ 津軽の飢饉供養塔

弘前市の隣にある平川市に、天明の飢饉の供養塔があります。この供養塔が建っている場所は地元では「ベビ塚」と呼ばれていました。こういうものが津軽地域にたくさんあると言われてきたのですが、実際にどのくらいあるのか、学生と一緒に調べてみました。足かけ3年くらい、津軽地域を歩いて飢饉の供養塔を探しました。その結果、合計104の飢饉の供養塔を確認することができました。先ほどの三大飢饉と関わらせてみますと、17世紀末の元禄の飢饉の供養塔が2基、それから天明の飢饉の供養塔が98基、そして19世紀の天保の飢饉の供養塔が4基です。

元禄の供養塔2基は弘前に1基、青森に1基あります。弘前は城下町、青森は領内随一の港町ですから、ともに都市です。続く天明の飢饉の供養塔98基は、もちろん都市部にもありますが農村地帯にたくさん分布しています。そして天保の飢饉の供養塔は4基しかありません。なぜ数が少なくなったのか、この理由についてはあとでお話したいと思います。

津軽で最も古い飢饉の供養塔は、蓮華寺(青森市)にあった元禄の飢饉の供養塔で、現在は三内霊園という場所に移されています。この供養塔の裏側に「元禄8年の秋に五穀が実らず、青森の町



天明の飢饉供養塔(青森県黒石市追子野木)

には餓死者があふれていた」と書かれています。碑は餓死者を葬った場所の上に建てられました。これを建てたのは蓮華寺のお坊さんだったと記されています。この元禄の飢饉の供養塔は青森のこれも、弘前でのもも、都市部の有力な商人が建てて、それを供養したのはお坊さんとなっています。

それに対して、津軽地域にたくさん見られる天明の飢饉の供養塔というのは、どれもささやかな小さいものです(写真を参照)。天明の飢饉の供養塔の場合、その多くは身内などを失った農民層が建てています。調査するときは和紙をはってその上から墨をうっていき拓本を取ると、文字がきれいに読み取れます。

この天明の飢饉の供養塔がいつ建ったのかということ調べてみました。天明の飢饉があった1783年と84年から建立が始まり、3回忌、7回忌と続いています。調べてみると23回忌あるいは50回忌というその節目の年に多くの飢饉供養塔が建てられていることが分かります。しかもこれらは、隣り合う村同士で競い合うように、それも似たような碑を建てているのです。要するに隣村をかなり意識した建立というのがあったわけです。飢饉供養塔というのはモニュメントであって、人に見せることを意識しています。自分の村は飢饉から立ち直ったよ、という意味表明でもあったのではないかと考えております。

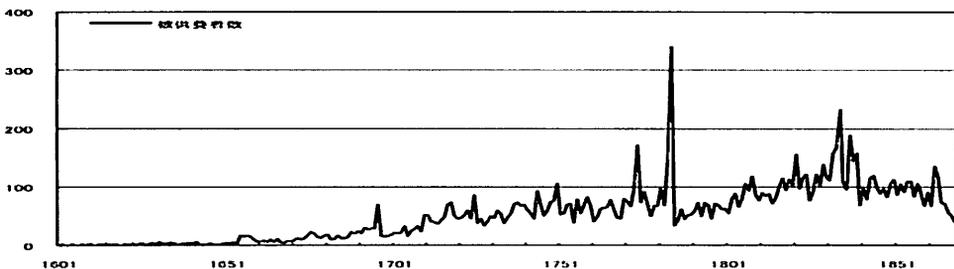
19世紀の天保の飢饉の供養塔は県内に4基しか確認されていませんが、その中の一つが弘前の和徳の専修寺というお寺にありまして、これはたいへんに大きなものです。ここには弘前周辺の40町村、延べ6390名の手伝いによって建てられた、何々村から何人と、たくさん村の名前順に、建立に協力した人数が書かれています。先ほど、天保の供養塔は4基しかないと言いましたが、その理由はここにあるだろうと考えています。要するに弘前周辺ではこの飢饉供養塔一つあれば全部の村には必要ない、というようなところだったのでしょう。

■ 墓石による歴史人口復元

江戸時代の人口を考えるうえではさまざまな文書、たとえば人別帳や宗門改帳といった文書資料を使うのが常道です。しかしそういった資料は地域によってはほとんどなかったり、あっても途切れ途切れにしか残ってなかったりします。それに比べて、これからお話します江戸時代の墓石は、北海道と沖縄を除けば、日本全国どこでも普遍的にみられます。もちろん墓石から分かるのは「どれくらいの人が死んだか」ということだけで、「どれくらいの人が生まれたか」というのは分かりません。それでも連続性があるというのは人口の変化を知るうえで強みです。

江戸時代の初めのころは一般の人は墓石を建てませんが、だいたい18世紀の後半になりますとかなりの人が、普通の庶民でも墓石を建てるようになってきます。そうであれば、順調に墓石やそこに刻まれる死んだ人の数が伸びてもいいのですが、そこには凸凹が見られます。津軽で調査した江戸時代の墓石7090基には、1万2404人の死んだ人が刻まれています。それを1年ごとに何人なのかと数えてみると非常に凸凹が激しい(グラフを参照)。現代であれば、平成20年と19年で死んだ人の数が大きく違うということはありません。しかし江戸時代の墓石に刻まれた死者の数を見ていくと、これだけの凸凹が見つかるのです。

次に、その墓石に対応する過去帳、つまりお寺に残された死者の名簿をもとに同じように一年ごとに死んだ人の数をカウントします。過去帳でも、元禄、天明、天保の飢饉のところで数値が跳ね上がっています。このぶれ具合を見ると、元禄の飢饉のときは墓石の数ではそれほど顕著ではありませんが、過去帳ではかなり跳ね上がっています。これは元禄の段階では墓石の普及がそれほど進んでないからでしょう。過去帳に名前は残すけれど墓石はない、という場合が多いのです。それでもわずかですが、元禄の飢饉があったということは墓石からも読み取れます。



津軽地方の墓石からみた死者数の推移

天明の飢饉、天保の飢饉になってきますと針のぶれ具合が墓石でもかなりはっきりしています。このころになると墓石が一般に普及していますので、墓石を調べただけでも変動が読み取れるわけです。また飢饉だけではなく、疫病による死者の増加なども墓石から読み取ることができます。

最後に、先ほどの藤田先生の話と関わる部分でお話しておきたいのは、この津軽地方と津軽海峡をはさみまして北海道に松前という都市がございます。津軽が米どころとすれば、松前周辺は米を作っていない非稲作地帯になります。去年から私のところでは松前でも近世墓標の調査をやっ

ています。まだ全部終わっておりません。去年は約4000基やりまして、今年残りの約2000基をやります。全部やらないと分からないのですが、3分の2をやった段階でのお話をちょっといたしますと、松前ではこの天明の飢饉の跳ね上がりがないわけではないのですが、非常に少ない。津軽海峡をはさんでたった10数キロしか離れていないのですが、津軽と松前では、天明の飢饉の被害はかなり違いそうです。今日の全体の話と関わる部分で皆さんいろいろ考えていただけたらと思います。

(せきね・たつひと／弘前大学)

山と飢饉

長谷川成一

私に与えられた表題は「山と飢饉」です。先ほど関根先生が津軽地方における飢饉の全体像についてお話くださいましたので、私は飢饉に遭遇した人々の救済の問題を、弘前藩の藩政との関わりにおいて述べたいと思います。

津軽地方は、17世紀の末から慢性的に不作・凶作が訪れる大変な時代に入ります。凶作や不作であれば飢饉になるということではありません。凶作や不作は天災ですが、飢饉は人災です。飢饉の発生は幕藩体制の市場構造に起因しますが、18世紀に入ると、この事態に直面した救済策が弘前藩ではいくつか打ち出されてきます。さきほど都市の話が出てきましたが、弘前藩を含め多くの藩の都市部においては、基本的に御救小屋や施粥などの救済措置が藩の手によって実施されました。では農村部はどうかといいますと、ほとんど救済策らしい施策がなされない、もしそれがなされたとしても都市部のそれに比較して不十分な施策なので、農村部の被害は大きくなりました。

弘前藩が打ち出した飢饉時の救済策は種々ありましたが、そのなかでも山林資源の活用が大きな柱であったことは間違いありません。今回は青森県の西側、すなわち世界自然遺産の白神山地を舞台とした飢饉救済策の具体的な例を述べていきたいと思っております。

■ 御救山・留山・明山

弘前藩の山林区分制度(区分図を参照)は、中興の英主と称された4代藩主津軽信政の時代、1667(寛文7)年に骨格がほぼできあがります。津軽領において、檜や杉の伐採ができる最優良の山を御本山(ごほんざん)と言い、これは藩にとってドル箱の山々ですから、藩が直接管理をしました。御本山は留山(とめやま)と呼ばれる制度下にあつて、基本的に領民が勝手に入ることはできません。たとえ入山を許されても、薪や柴といった日常生活の燃料で使う木々についてのみ採集を許されました。それに対して明山(あきやま)とは、百姓農民に山林の利用が許可されている山々を指します。18世紀後半の津軽領内の山は52%が留山でしたから、半数以上の山には領民が勝手に立ち入ることができず、厳重な山林統制が行われてきました。

次に、御救山(おすくいやま)とは何かということに触れたいと思います。

白神山地の地域を中心と考えてみますと、御救山とは、留山のなかで凶作や飢饉のときに入山を許可された山と定義されます。この御救山の制度は、元禄8～9(1695～96)年、北奥羽を襲った大飢饉の時に成立したのではないかと推測されます。

弘前市立弘前図書館に所蔵されている「御山所書上之覚」(ごさんしょかきあげのおぼえ)(図版を参照)によると、現在の白神山地にあたる地域に全部